

# 教会大学と日中戦争

—「北平私立輔仁大学檔案」(1925-1952年)から見た戦時下の学生収容—

王 京

WANG Jing

(COE研究員・RA)

はじめに

アジアの近代化の過程を考える際、宗教、教育、文化、出版、医療など広範囲にわたる欧米の教会や宣教師の活動はきわめて重要な意義を有している。たとえば、教育活動で言えば、欧米の教会によって支援、運営される私立大学は中国、日本、韓国などの教育の近代化、人材の養成、欧米との文化交流などの面で大きな役割を果たしてきた。

中国においては、こうした教会大学は19世紀後半から現れ、20世紀初頭に大きな発展を遂げた。そして1920年代には中国側の教育権回収運動、教育宗教分離運動という衝撃のもとで徐々に土着化してゆき、1930年代に新しい発展期を迎えようとしていた。1931年時点で、中国全国の高等教育機関108(うち、未登録5)校のうち、欧米系大学が22(うち、未登録5)校あり(教育部編1934)、そのほとんどが教会大学の系統に属し、教会とは直接関係のない機関はわずかに中法大学と北平協和医学院の2校であったとされる。いわゆる欧米系大学はほぼ教会大学と重なっている。教派からみると、カトリック系は上海の震旦大学、北平輔仁大学と天津工商大学(1933年から学院)の3校のみで、多くはプロテスタント系大学であった。しかしこれらの教会大学はまもなく日中戦争の影響で破壊、閉校や移転などを余儀なくされ、1945年以降には国共内戦を経験し、さらに新中国成立後その他の大学に合併され、完全に中国大陸から姿を消していった。

これらの大学についての研究は、まず欧米の教会側の報告などがある(たとえばNational Christian Council 1910-1939など)。日本では、外務省の対支文化政策の一環として中国における欧米の文化活動が

調べられ、その一部として教育施設に関する調査が行われた(たとえば外務省文化事業部編 1925; 1929など)。1942年に『近代支那教育史—第三国対支教育活動を中心として』(平塚 1942)というまとまった研究成果が刊行されたが、その後関連する研究が殆ど行われていない。

戦後、欧米の研究として1954年から、米国の中国キリスト教大学連合董事会(United Board for Christian Colleges in China.後、アジア・キリスト教高等教育連合董事会, United Board for Christian High Education in Asia. U.S.A)によって在中国プロテスタント大学10校の小史が刊行され<sup>(1)</sup>、さらに70年代に入るとジェシー・ルズの『中国とクリスチャン大学 1850-1950』(Jessie Lutz 1971; 曾鉅生訳 1988)やフィリップ・ウエストの『燕京大学と中西関係』(Philip West 1976)など代表的な研究が出版された。台湾においても1950年代から一部関係者による資料整理や研究が進んでおり、1980年代に『学府紀聞』シリーズ全21冊<sup>(2)</sup>が出版されている(董蔚総編集 1982)。

欧米の研究は教会が所蔵している資料をベースにしており、台湾の研究はキャンパス生活、人間関係、逸話など関係者の回想などが多く盛り込まれている。しかし、中国の政府や大学側の資料が少なく、全体として概略的な紹介が多く見られ、中国の教会大学についてはまだ十分な研究がなされたい。その理由の一つとして、教会大学に関連する多くの資料が戦争期の混乱の中で散逸してしまい、加えて中国大陸では1950年代以降、「教会大学=帝国主義文化侵略の拠点」という認識が定着し、研究は勿論、関連資料の収集、整理も大きく制限されていたことが挙げられる。

しかし1980年代末から、華中師範大学の章開沅教授

(1926-)を中心とした国内外の研究者の努力によって、中国の教会大学に関する歴史研究が再び注目されるようになった。1989年に初めての中国教会大学史国際シンポジウムが開催されて以来、中国大陸及び台湾、香港、アメリカの研究者の間で密接な交流が行われ、これまで既に10回以上の国際シンポジウムが開催され、シンポジウム論文集も6冊が出版されている<sup>(4)</sup>。なお1994年には華中師範大学中国教会大学史研究センターも創設された<sup>(5)</sup>。

中国の教会大学に関する新しい研究の特色の一つは価値観の転換にあり、教会の活動と帝国主義・植民地主義の侵略政策をはっきり区別し、教会の活動の中でも特に教育の機能に注目し、中外文化交流史や中国近代教育史における教会大学の役割を再評価しようとしている。研究のもう一つの特色は、基本資料の整理に努めると同時に一次資料の発掘に力を入れ、とくに中国各地の檔案館所蔵の資料を積極的に利用するところにある。前者についてはたとえば、『中国教会大学史研究叢書』(華中師範大学中国教会大学史研究センター編 1999)では、前述した米国中国・キリスト教大学連合董事会による教会大学の小史を訳出している<sup>(6)</sup>。後者としては、『総覧』と南京第二歴史檔案館、華中大学(武漢)、華西医科大学(成都)、上海市檔案館などの所蔵資料4冊からなる『中国教会大学文献目録』(吳梓明・梁元生総編集 1996-1998)が出版された。2004年に出版された『中国の教会大学』(章開沅総編集)シリーズ(写真1)は、研究の最新成果を示しているといえよう。シリーズに収録された各研究は大学や地方檔案館所蔵の資料などを駆使してなされた画期的なものであり、それによって今まで知られていなか



写真1 『中国の教会大学』シリーズ (2005年12月筆者撮影)

った多くの事実が明らかになった。

以上、中国大陸の活発な動きによって、中国の教会大学に関する研究が新しい局面を迎えたことを述べてきた。筆者は数多い教会大学の中でも特に北京の輔仁大学に注目する。その理由としては、同大学は日中戦争の影響で①経営を中止する、②経営を継続するが、非戦闘地域に移す、③当地に留まって経営を継続するという三者択一の決断を強いられた中、日本支配下の北京にとどまって引き続き運営していた<sup>(8)</sup>ということに加え、その戦時下の状況を窺う資料として「北平私立輔仁大学檔案」が現存しているからである。

輔仁大学については、台湾では前述「学府紀聞」シリーズの一冊として『私立輔仁大学』(董偉総編集 1982)が出版され、台湾輔仁大学の大学史としても研究がなされてきた(輔仁大学校史室編 2002)。中国大陸では、北京師範大学の校史の中で一部触れられており(北京師範大学校史編写組 1984)、さらに最近、『輔仁大学』(孫邦華編著 2004)は前述『中国の教会大学』シリーズの一冊として出版された。これらの先行研究は、輔仁大学の沿革の整理や教師、卒業生の紹介などに重点がおかれ、戦時下の記述については抗日と愛国活動に焦点が当てられている。外国との関係に関しては、欧米教会とのつながりや宣教師たちの活躍などは比較的详细に記されているが、当時の中国と最も深い関係にあった日本との関わりは、日本人留学生、日本人教員の状況や活動などを含め、ほとんど整理されていない。このような研究状況は、輔仁大学と同じく占領区(上海)に留まっていたセントジョン(聖約翰)大学に関しても同様である。

筆者は2005年7月、神奈川大学21世紀COEプログラムの若手研究者海外派遣の機会に恵まれ、北京師範大学が所蔵する「北平私立輔仁大学檔案」(以下、「輔仁檔案」)を閲覧することができた。同檔案には、戦時下のキャンパス生活が見える調査表や、留学生、日本語・日本文化教育、日本人教員などの関連資料が多数含まれており、それについては別稿で分析するつもりである。今回の報告では、まず輔仁大学と「輔仁檔案」について簡単に紹介し、次に輔仁大学が、戦時中北京を中心とする高等教育の分野の空白を埋めるべく、全国からの大学の学生を受け入れていたことにつ

いて触れておきたい。その際、日本の外務省記録や陸軍・海軍側の関連資料も参照する。

## I 輔仁大学と「輔仁檔案」

輔仁大学は戦前中国における数少ないカトリック大学の一つである。1850年に上海徐家匯で中国初めてのカトリック系学校「徐匯公学」が作られて以来、20世紀初めにはカトリック系学校は大きく発展を遂げていたが、大学は1903年馬相伯（1840-1939）が創立した震旦大学のわずか1校しかなかった。このような高等教育の不足を改善するために、1912年、馬相伯と中国カトリック教会のもう一人のリーダー英敏之（1867-1926）はローマ法王に北京でカトリック大学の創設を提言したが、まもなく教皇が亡くなり、第一次世界大戦が勃発したため実現には至らなかった。その後、1922年に即位した教皇Pius11世の積極的な支持のもとで、ペンシルベニア州にあるSt. Vincent Archabbey（聖文森会院）を中心に、アメリカのベネディクト会は1925年李広橋西街十号の載壽（光緒帝の弟）旧宅を借り、大学（当時の名前は北京公教大学、Catholic University of Peking）の準備作業に取り掛かった。大学の予備コースとして、1925年7月に輔仁社（『論語』の「会友輔仁」から名づけたもので、社長は英敏之）が創立され、10月に信者の青年23名が入学し、これが大学の前身とされている（写真2）。



写真2 1925年北京公教大学附屬輔仁社簡章  
（台湾輔仁大学校史室ホームページより引用）

輔仁大学は、セントジョン大学（前身が1879年）や嶺南大学（前身が1888年）などと比べると創立は遅いが、短期間で急速に成長していった。1927年11月に北京政府教育部の許可で正式に私立大学となり、中国語

の名前を公教大学から輔仁大学に改めた。そして校長陳垣（1880-1971）の指導と努力の下で優秀な教師陣を確保することができ、早くも1930年代には、北京大学、清華大学、師範大学、燕京大学と並び北京の五大名門と言われるようになった（写真3）。1937年以降も北京に留まって経営を続け、学生の増加や学部、大学院の増設など大きな発展を遂げていた。新中国成立後、全国の大学の再編成が進み、教会大学はすべて他の大学に合併されることになるが、輔仁大学も1952年にその大部分が北京師範大学に合併された<sup>(10)</sup>。



写真3 1930年代の輔仁大学キャンパス一角  
（『輔仁年刊』1936年の口絵より引用）

「輔仁檔案」には、1925年の創立準備作業から、1952年に北京師範大学に合併されるまでの学校の公式記録が、解放前（1948年まで）と解放後（1949年以降）に分けて保管されている。とくに解放前の資料は、総類23巻、人事類69巻、教学教務類544巻、政治類65巻、総務財務類22巻、附属学校関係28巻、年刊同学録など37巻と資料33巻という膨大な数に上っている。なお、解放後に関しては総類27巻、人事類25巻、教学教務類63巻、総務財務類24巻、附属学校関係7巻などの資料がある。

これら貴重な資料が保存できたのは、陳垣の存在と深く関わっている。陳垣は英敏之に託されて1926年1月に輔仁社の社長、同年9月に北京公教大学の副学長になる。1927年に北京政府教育部の『私立学校規程』によって取締役会が作られてから一貫として取締役であり、1929年に南京国民政府が『私立学校規程』で外国系学校では中国人が校長に当たるべきと決めた後、校長に就任し、大学が合併されるまでその職にいた。

こうして彼は長い間、輔仁大学の運営に深く関わっていただけではなく、さらに合併後も、1971年に亡くなるまで輔仁大学を吸収した北京師範大学の校長を務めていた。その上、高名な歴史家でもあった彼は資料の大切さを充分理解していた。これらのことが幸いし、輔仁大学の檔案は幾度も困難な状況を乗り越えて今に伝わってきた。

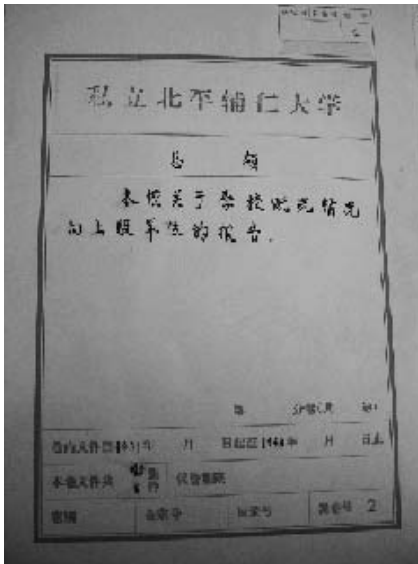


写真4 「輔仁檔案」巻2表紙（2005年7月筆者撮影）



写真5 1931年9月学生席振鐸入学申請の手紙  
(2005年7月筆者撮影)

このように満州事変後すでに輔仁大学が戦争の影響を受けた学生を収容した事実はあったが、輔仁大学と戦争との関係をさらに詳しく知ることができるのは、盧溝橋事変以降と太平洋戦争勃発後である。

## II 輔仁大学と戦時下の学生収容

檔案資料の中で、輔仁大学と戦争の関連は満州事変から始まっている。

「輔仁檔案」には事変に関連する様子などは直接書かれていないが、戦争の影響が窺える資料として、事変直後の9月24日付の、学生席振鐸による手紙がある(写真5)。それによると、彼は1931年の夏休みに「南洋」(華東の沿海地域を指すか)での勉学を終え、進学するために北平に上京した。馮庸大学(のち東北大学)に合格し、いよいよ9月20日に瀋陽に赴く予定であったが、「倭奴が暴動し、国難が突然起こる」ことによって勉強する場を失った。そこで「経営有年、成績卓著、旧都の冠を為す」輔仁大学への入学を願い出ている。

彼の申請は10月2日付、収文字第392号で受理され、申請書に記載された学歴と大学合格という事実が確認でき次第、試験免除で教育学部への入学を許可するという指示が書き込まれている。

### 1 盧溝橋事変後

1937年盧溝橋事変が起こり、7月末、日本軍に抵抗した第29軍が撤退し、北京は占領された。その直後の8月1日に「北平市地方維持会」が発足し、さらに12月14日に日本側の指示を仰ぐ「中華民国臨時政府」が成立した。北京にあった多くの国立及び私立大学は日本軍に占領される前に非戦闘区域の内陸へ移動したが、その他の大学は臨時政府に接收、再編された。輔仁大学、燕京大学、協和医学院、中法大学などは外国が運営している関係で、辛うじて残り、独自の教育活動を展開していた。

輔仁大学取締役会規程の第8条では、毎年3月の第2週に定例会の召集が決められているが、1938年は戦争の影響で開催することが出来ず、大学当局は取締役側に報告書を提出している(「輔仁檔案」巻2所収)。そこでは国際情勢で教会側が提供できる資金が減少し、南京政府教育部からの補助も届いておらず、財政が非常に困難であるため、教育部及び中華文化教育基金董事会(米国)の補助金が獲得できるよう、取締役たちの働きかけを求めている。教育活動に関しては「盧溝橋事変以来、本校の同人は(教育)部の訓令に

基づき、学生の勉学が中断しないように全力を挙げた。廿六（1937）年九月に通常とおりに開学し、借読及び転学の学生を含め、在籍学生数が583名にも上っている」と報告している。

「借読生」とは、正式な学籍がないまましばらく勉学する学生という意味である。この中には抗日運動をはたらく学生がいるのではないかと、日本側は早くも目を留めた。1937年9月28日付、在中華民國（北平）大使館参事官森島守人より外務大臣広田弘毅宛の機密第629号「事变後ニ於ケル北平教育並文化機関ノ現状報告ノ件」<sup>(13)</sup>では、燕京大学は「今次失学ノ学生救済ノ意味ヲ以テ地方維持会ノ承認ヲ得テ借講生ノ制度ヲ設ケタル処、右ハ失学ノ不良学生収容（傍点は筆者）スルノ嫌疑アリトシ非難セラレツツアリ」と述べている。ここの「借講生」は借読生の訳であろう。

しかし残念ながら、ほぼ同時期の軍特務部の資料「事变後ニ於ケル北平各大学状況概要及意見」<sup>(14)</sup>（昭和12年9月末日調）では、輔仁大学の項で「旧北平、北京、師範、清華ノ学生八十名ヲ借読生トシテ収容セリ」と報告されているが、燕京大学の項では借読生については全く触れられていない。今のところ、燕京大学の具体的な状況を明らかにすることはできないが、輔仁大

表1 輔仁大学1937年度借読生出身校一覧

	出身校	人数(名)
1	北京大学(北京)	24
2	朝陽学院(北京)	10
3	清華大学(北京)	9
4	齊魯大学(山東)	7
5	師範大学(北京)	5
6	民国学院(北京)	4
7	南開大学(天津)	4
8	交通大学(北京)	2
9	天津工商学院(天津)	1
10	同濟大学(上海)	1
11	北平大学(北京)	1
12	東北大学(北京)	1
13	芸術専科学校(北京)	1
	合計	70

注：「輔仁大学二十六年度借読生一覧」（「輔仁檔案」巻122所収）により作成。

学に関しては裏づけられる資料が「輔仁檔案」に保管されている。以下、それについて整理してみたい。

「輔仁大学二十六年度借読生一覧」（「輔仁檔案」巻122所収）によれば、輔仁大学は1937年度（同年9月－1938年6月）、北京大学などの13校から70名の借読生を収容している（表1参照）。

この中、北京大学、清華大学、師範大学、北平大学、芸術専科学校は北京にある国立大学である。朝陽大学（1913年に創設）と民国大学（1916年に創設）は北京にある私立大学で、1930年に大学から学院に改名。齊魯大学は山東にある英米の教会学校が1904年に合併されてできた大学である。南開大学は天津の私立大学である。交通大学は上海、河北唐山、北平の三ヶ所にキ

表2 輔仁大学1938年度借読生出身校一覧

	人数	第一学期 (1938.10)	第二学期 (1939.3)
1	北京大学(北京)	24	
2	南開大学(天津)	10	2
3	齊魯大学(山東)	10	
4	清華大学(北京)	9	1
5	師範大学(北京)	6	
6	朝陽学院(北京)	6	
7	交通大学(北京・上海)	5	
8	民国大学(北京)	3	
9	北平大学(北京)	1	1
10	天津工業学院(天津)	3	
11	私立南州文学院(江西)	1	
12	山東大学(山東)	1	
13	東呉大学(蘇州)	1	
14	金陵大学(南京)	1	1
15	中国大学(北京)	1	
16	ハルビン工業大学(ハルビン)	1	
17	暨南大学(上海)		1
18	嶺南大学(広東)		1
19	西南連合大学(昆明)		1
20	中法大学(北京)		5
	合計	16校83名	8校13名

注：「私立北平輔仁大学二十七年度借読生一覧表（民国27年10月）」と「私立北平輔仁大学二十七年度借読生一覧表（民国28年3月）」（ともに「輔仁檔案」巻122所収）により作成。

キャンパスがある。東北大学は前に触れた馮庸大学のことで、満州事変後、1931年冬に北平に移し、1932年10月に校名を変えた。上海にある同済大学を除くと、学生の出身大学はほぼ北京、天津、山東など華北地域に限定している。

「私立北平輔仁大学二十七年度借読生一覧表（民国27年10月）」（「輔仁檔案」巻122所収）では、1938年度前期、16校からの83名の借読生がリストアップされている。出身大学は前年度の北京、南開、齊魯、清華、師範、朝陽、交通、民国、北平など以外、新たに天津工業学院、私立南州文学院、山東大学、東呉大学、金陵大学、中国大学、ハルビン工業大学などの名前が見える（表2参照）。中国大学は1912年に北京で創立した私立大学で、1930年中国学院に改名。南州文学院（江西）、東呉大学（蘇州）や金陵大学（南京）などが新しく見えたのは戦局が華北から華中に推移したことの反映であると理解することができよう。

「私立北平輔仁大学二十七年度借読生一覧表（民国28年3月）」（「輔仁檔案」巻122所収）では、1938年度後期に入ってきた8校から13名の借読生の名前が載せられ、出身大学は南開、北京、清華、金陵以外、暨南大学、嶺南大学、西南連合大学、中法大学が新たに見えた（表2参照）。暨南大学は上海にある。西南連合は、長沙に移転した北京、清華、南開などの諸大学が長沙臨時大学として合併してからさらに昆明に移ってからの呼称である。戦局の拡大によって華北、華中に繼いで嶺南大学（広東）のような華南の大学も見えるようになった。

とくに注目に値するのは、中法大学からも多くの学生が来ていることである。中法大学は1920年に創設され、主としてフランス政府が義和団賠償金の返還分で運営している大学である。しかし同じく第三国運営でありながら日中戦争勃発後、燕京大学や輔仁大学と全く違う経験をさせられた。

昭和13年6月18日付、甲集団参謀長より陸軍省次官次長宛の秘電報甲方参二電第884号では、燕京、輔仁、中法など第三国資本関係の大学を新民会主宰の剿共滅党週間運動に参加させることの進展状況を報告している<sup>(15)</sup>。それによると、燕京大学は快諾、輔仁大学は基本的に賛成するが入校勧誘に表面上同意できないというのに対して、中法大学関係の仏国代理大使は部外者が校内入りで勧誘することに絶対反対であった。そこで軍は、三校とも条約上その財産が不可侵であることを認めつつ、「逐次矯正して日本及臨時政府統制下ニ入ラシムヘキ」という認識を示し、燕京大学と輔仁大学について触れず、中法大学に対しては「先方カ折レサル限り逐次圧迫ヲ加ヘテ授業継続ヲ不可能ニ陥ラシムヘク、止ムヲ得サレハ閉校命令ヲ発」することも辞さない態度をとっている。事実上、軍側の弾圧によって中法大学はまもなく閉校に追い込まれた。その後、フランス大使館が昆明で「中法大学弁事処」を設けたが、結局大学は再開することはなかった。

卒業アルバムである『輔仁年刊』1938年（「輔仁檔案」巻765）では、正規の卒業生以外、この年学業を終えた各校からの借読生20名の名前もリストアップされている（表3参照）。

表3 輔仁大学1938年終了借読生受入学部及出身校一覧

出身校 \ 所属学部	国 文	西 語	史 学	社会経済	数学物理	心 理	美 術	合 計
北 京 大 学	2	3		2	4			11
師 範 大 学	2		1					3
清 華 大 学			1			1		2
東 呉 大 学			1					1
朝 陽 大 学				1				1
齊 魯 大 学				1				1
芸 術 専 科 学 校							1	1
							合 計	20名

注：『輔仁年刊』1938年度（「輔仁檔案」巻765）により作成。

「私立北平輔仁大学二十八年借読生一覧表」(「輔仁檔案」巻125所収)では、1939年度、天津工業学院(2名)、北京大学(1名)、朝陽大学(1名)、中国大学(1名)、西南連大(1名)など5校からの6名の学生が記録されている。しかしすべて1937、1938年度に入った学生で、この年に新たにきた者はいなかった。なお、この年以降、借読生に関する資料は「輔仁檔案」から無くなった。

## 2 太平洋戦争後

1941年12月8日、真珠湾攻撃により太平洋戦争が勃発した。攻撃直後、日本憲兵がキャンパスに押し入り、燕京大学と協和医学院などは強制的に閉校させられた。

一方、輔仁大学の運営は、世界的な経済恐慌の影響を受け、1933年に、ローマ教会の命令でアメリカとドイツの神言会(Society of the Divine Word)<sup>(16)</sup>に移った。その後、政治情勢に対応するため、ドイツ人ラーマン(中国名は雷冕Rudolf Rahmann 1902-1985)が校務長(1936年9月-1946年7月)に就任し、大学の管理層や教職員も次第にドイツ勢に変わり、日本人教職員も次第に増えていった。日独が同盟関係にあるという特殊な背景によって、太平洋戦争に入ってからでも輔仁大学は教育の自主権を保つことができた。

「輔仁檔案」巻158「教学教務類 燕京大学、協和医学院両校から転入する学生のリスト、成績及び転学を申請する材料」には、1942年から1943年にかけて、閉校によって勉学の間を失った燕京大学、協和医学院のもと学生を受け入れることに関する書類が収められている(写真6)。

それによれば、1942年3月9日に、華北政務委員会教育総署督弁周作人の名義で輔仁大学宛の教字第276号訓令が発令された。訓令では燕京大学、協和医学院の在籍学生に対する審査が終わり、両校学生は北京大学の各学部あるいはその他国立及び私立の各大学に編入されるべきであるとして、輔仁大学へ編入予定の学生59名の関係書類を送付している。さらに約一ヶ月後の4月初めに、追加分として14名の書類が送付された(教字第410号訓令)。

ここの北京大学は、臨時政府が旧北京大学の校舍及

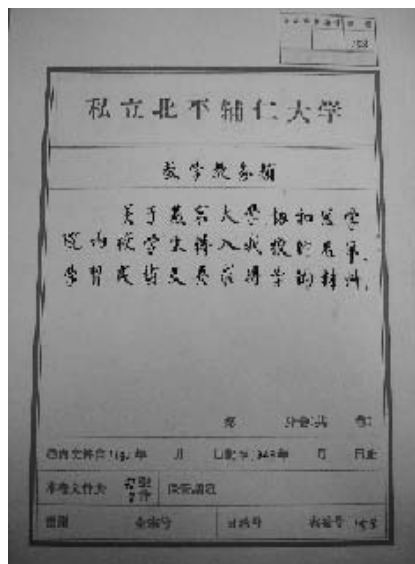


写真6 「輔仁檔案」巻158表紙(2005年7月筆者撮影)

び設備を襲用して1938年につくった同名の大学で、傍点の箇所が示しているように、燕京・協和両校学生の他校編入に当たって当大学は別格である。

輔仁以外の大学への割当数はいまのところ明らかではないが、編入先としての輔仁大学の重要さは以下の資料から窺えよう。

編入先はすべて教育総署によって一応決められているが、当然ながら経済状況や専門などの理由で他の学部や大学に行きたい学生が出てくる。3月31日付の教育総署訓令第408号では、転出を願い出た学生23名の名簿が添付されている。その中、輔仁大学から転出を希望する者が3名で、志望転学先は北京大学(1名)、師範大学(2名)など比較的<sup>(17)</sup>に学費が安い国立大学が多く、経済的な理由によるものと思われる。それに対して輔仁大学に転入したい学生が10名で、北京大学から転出しようとする1名以外、9名の志望転学先は「北京大学或は輔仁大学」という形になっている。志望転入先としては、輔仁大学は北京大学に継ぐ二位であった(三位の師範大学は僅か2件)。編入先として輔仁大学は大きく機能していたことが分る。

輔仁大学が収容した燕京大学と協和医学院学生の状況は、教育総署の調査(訓令教字第566号)に対する1942年5月5日付の大学の報告から知ることが出来る(写真7)。

それによれば、最初予定された59名のうち、既に登録、入学したのは男子12名と女子38名計40名である。

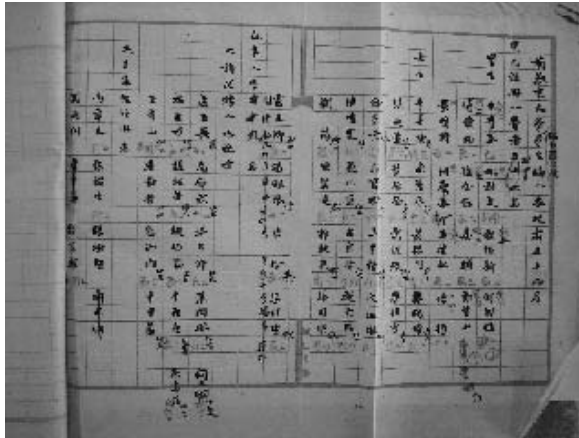


写真7 1942年5月燕京大学・協和医学院学生收容状況についての報告書 (2005年7月筆者撮影)

編入学部から見れば、男子は教育がトップで6名、二位が史学、以下、社会、新聞、西洋言語、心理などと続く。女子は家政がトップで12名、二位が社会と教育で各7名、続いて化学、西洋言語などである（表4参照）。学年から見れば一年3名、二年17名、三年7名、四年13名である。その外、登録はしたが、他校への転出志望者が14名、登録手続が未完了の者が5名とそれぞれいる。それに対して、一旦他校に編入してから本校に転入した学生が男子11名、女子8名の計19名である。

追加予定の14人のうち、登録済みが男子1名（三年）と女子5名（一年1名、三年、四年各2名）の計6名（表4参照）。休学した男子が2名、まだ入学手続が完了してない者が6名（うち他校転出希望者が4名、未登録者が2名）である。

なお、これら編入学生の燕京大学・協和医学院時代の成績表などは北京大学で一括管理されており、必要

なときは北京大学に申し込まなければならない。<sup>(18)</sup> また他の学生と区別するために、各大学がかれらに発行する卒業証明書及び控えの最終行「ここに証明する」という一文の下に、「当人はもと私立□□□□の学生で、民国三十一年□月本校に編入」という青い印鑑を押し、添書きをすることが義務づけられている。<sup>(19)</sup>

1942年6月1日に、教育総署総務局が、旧燕京大学の学生が燕京キャンパスに残した私物について、身分を証明できるものを持参の上、返還可能ということを知らせている。通達に添付されている「燕京大学私物品返還区分表」には、それら物品の受け渡しに関する時間と場所が明記されている。太平洋戦争が始まって半年、他校への編入もちょうど一段落し、燕京大学の学生はようやく私物を取戻して再び勉学の態勢を整えることができるようになった。

おわりに

以上、「私立輔仁大学檔案」を資料に、戦時下、輔仁大学が他大学の学生を受け入れていたことについて簡単に整理してみた。それによれば、輔仁大学は早くも満州事変の直後に戦争の影響で勉強する場を失った学生を個別的に受け入れており、日中戦争勃発後には、さらに積極的に学生を受け入れ、「借読生」という特別制度の下で、1937年から1938年にわたり、内地に移転した北京、天津、山東など華北地域の大学、そして戦争の進行で占領その他の影響を受けた他の大学の学生を收容していたことを確認することができた。また太平洋戦争によって廃校を余儀なくされた燕京大学と

表4 1942年燕京大学・協和医学院からの編入学生一覧（入学済分）

男子

学部	人数	一次	追加
教 育		6	
史 学		2	
社 会		1	1
新 聞		1	
西 洋 言 語		1	
心 理		1	
合 計		12名	1名

女子

学部	人数	一次	追加
家 政		12	2
社 会		7	3
教 育		7	
化 学		1	
西 洋 言 語		1	
合 計		28名	5名

注：「輔仁檔案」巻158により作成。



協和医学院の学生の編入先として大きく機能していたことなども明らかになった。こうして輔仁大学は外国によって運営されたという立場を生かして、戦時下中国の高等教育の維持と発展に大きく寄与していた。

輔仁大学と日本との関係は決して戦争によって始まったものではなく、それ以前から視察、訪問、研究などいろいろな交流があった。しかし日本とのより深い関わりは不幸にも戦争によってもたらされ、さらにドイツ系教会大学という特殊な立場によって補強された。輔仁大学は戦時下、外務省から「外国経営学校善導の模範校」の有力候補として目されていたし、一方、日本軍の占領下において教育の自主を堅持したとして、占領された間に出した学位が戦後国民政府の追認を受けた。中国の教会大学と日中戦争との関係を考える上で興味深い事実である。

## 注

- (1) のちに『中国近現代教育文献資料集』（佐藤尚子・阿部洋編 2005）の第3巻に収録されている。
- (2) 福建協和大学、金陵女子大学、之江大学、齊魯大学、東呉大学、華中大学、華西協和大学、燕京大学、セントジョン（聖約翰）大学、華南女子文理学院などの10校を取り上げている。
- (3) 総論以外、中山大学、中央大学、北京大学、北洋大学、西南連合大学、交通大学、武漢大学、河南大学、東北大学、政治大学、南開大学、清華大学、復旦大学などの国立13校と大夏大学、中国公学、金陵大学、セントジョン大学、輔仁大学、齊魯大学、燕京大学などの私立7校が挙げられている。
- (4) たとえば『中西文化と教会大学』（章開沅・林蔚編 1991）、『中国キリスト教大学論文集』（林治平編 1992）、『中国教会大学史論叢』（顧学稼・林蔚・伍宗華編 1994）、『中国教会大学歴史文献シンポジウム論文集』（呉梓明編 1995）などがある。
- (5) センターの刊行物として『中国教会大学史研究通信』（華中師範大学中国教会大学史研究センター・香港中文大学崇基学院編 1994～）が発行されている。
- (6) 『中国教会大学史研究叢書』の第一期は10冊、注2のうち、燕京大学、セントジョン大学、華南女子文理学院以外の7冊は中国語に訳出されている。それ以外は著書で、董黎の『中国教会大学建筑研究』、史静寰の『狄考文と司徒雷登—西洋プロテスタント宣教師の中国における教育活動に関する研究』、徐以驊の『教育と宗教：宣教の媒介としてのセントジョン大学』などがある。
- (7) セントジョン大学、華中大学、福建協和大学、華西協和大学、東呉大学、輔仁大学、金陵女子大学の7校が取り上げられている。
- (8) 『抗戦中の中国文化教育』（延安時事問題研究会編 1961）によると、欧米系を含む中国の大学108校のうち一部は（17校）経営中止を、大多数（77校）は非戦地域に移して経営することを選んだという。留まって経営継続するのは最も少ない14校であり、成都の華西協和大学、北平の燕京大学、協和医学院、輔仁大学、中法大学、上海の震旦大学、セントジョン大学、滬江大学、天津の天津工商学院などの欧米系大学が含まれている。しかしその中で中法大学はいち早く閉校させられ、アメリカ系の燕京、協和、滬江も太平洋戦争勃発後まもなく閉校し、戦時中一貫として留まって運営できたのは、華西協和大学、輔仁大学、天津工商学院、震旦大学、セントジョン大学の僅か5校である。なお、カトリック系の3校とも最後まで居続けられたことは興味深い事実である。
- (9) 新中国成立後の大学再編成で北京の輔仁大学はなくなったが、台湾では一部の関係者の努力で輔仁大学の名前を受け継いで1961年に再出発した。
- (10) 哲学、経済、社会、西洋言語学部などの一部はそれぞれ北京大学、中国人民大学、中央財経学院、北京外国語学院などに編入された。
- (11) 以上、輔仁大学の概況については「輔仁檔案」巻2「学校概況に関して上級機関に対する報告」、同巻3「学校沿革」、『北京師範大学校史（1902-1982）』（北京師範大学校史編写組 1984）や『輔仁大学』（孫邦華編著 2004）などによる。
- (12) 以下は「輔仁檔案」巻159所収「民国二十年収文字第三九二号」による。
- (13) 外務省記録H-7-2-0-4-1-6「参考資料雑件/学校及学生関係 第六巻」を参照。
- (14) 同上。
- (15) 陸軍省—陸支密大日記-S14-12-101（防衛庁防衛資料館蔵）。
- (16) 神言会は1875年にドイツ人によってオランダで設立されたカトリック団体で、文学名著の印刷、教会での高等教育などに力を入れ、1937年には9,000人規模の信者がいた。
- (17) 4月21日付の訓令教字第545号では、教育総署は輔仁大学に編入学生の成績表55人分を送付しているが、参考後、北京大学に返還するよう指示している。
- (18) 1943年2月19日付の申請で学生李爽麟が、成績の取り寄せを願っている。李は、編入前協和医学院の一年生で、1942年夏に燕京大学の理学士の学位が授与されるはずであったが、閉校以降、輔仁大学の生物学部に転学した。また2月15日編入前燕京大学生物学部三年生であった蕭鈞の申請も、証明書の早期発行を依頼する内容であった。それを受けて2月26日、輔仁大学は北京大学弁事処宛に、李、蕭二人の成績を取り寄せている。
- (19) 1942年5月11日付の教育総署訓令教字第674号による。
- (20) 外務省記録H-6-2-0-26-022「寄贈品関係雑件第二十二巻」を参照。

参考文献

北京師範大学校史編写組

1984『北京師範大学校史（1902-1982）』北京：北京師範大学出版社.

董鼎編

1982『学府紀聞』台北：南京出版公司.

輔仁大学校史室編

2002『虹霓の記号-輔仁大学校史』台北：輔仁大学出版社.

外務省文化事業部編

1925『欧米人ノ支那ニ於ケル文化事業』

1929『欧米人ノ支那ニ於ケル主ナル文化事業』

顧学稼・林蔚・伍宗華編

1994『中国教会大学史論叢』成都：成都科技大学出版社.

平塚益徳

1942『近代支那教育史-第三国対支教育活動を中心として』東京：目黒書店.

華中師範大学中国教会大学史研究センター・香港中文大学崇基学院編

1994~『中国教会大学史研究通信』

華中師範大学中国教会大学史研究センター編

1999『中国教会大学史研究叢書』珠海：珠海出版社.

Jessie Gregory Lutz

1971 *China and the Christian Colleges, 1850-1950*

London: Cornell University Press. (曾鉅生訳1988『中国教会大学史：1850-1950』杭州：浙江教育出版社.)

杭州：浙江教育出版社.)

教育部編

1934『第一次中国教育年鑑』上海：開明書店.

林治平編

1992『中国キリスト教大学論文集-中国近代化過程におけるキリスト教大学教育の役割と影響シンポジウム論文集』台北：宇宙光.

National Christian Council

1910-1925 *China Mission Yearbook.*

1926-1939 *China Christian Yearbook.*

Philip West

1976 *Yenching University and Sino-western Relations*

Cambridge: Harvard University Press.

佐藤尚子・阿部洋編

2005『中国近現代教育文献資料集』第3巻，東京：日本図書センター.

孫邦華編著

2004『輔仁大学』（『中国の教会大学』シリーズ，石家荘：河北教育出版社.

呉梓明・梁元生・李金強編

1998『中国教会大学文献目録第一輯 中国教会大学歴史文献総覧』香港：香港中文大学崇基学院.

呉梓明・梁元生総編集；鄺玉明編

1996『中国教会大学文献目録第二輯 中国第二歴史檔案館館藏資料』香港：香港中文大学崇基学院.

呉梓明・梁元生総編集；馬敏・方燕編

1997『中国教会大学文献目録第三輯 華中師範大学檔案館館藏資料』香港：香港中文大学崇基学院.

呉梓明・梁元生総編集；張麗萍編

1997『中国教会大学文献目録第四輯 華西医科大学檔案館館藏資料』香港：香港中文大学崇基学院.

呉梓明・梁元生総編集；馬長林編

1998『中国教会大学文献目録第五輯 上海市檔案館館藏資料』香港：香港中文大学崇基学院.

呉梓明編

1995『中国教会大学歴史文献シンポジウム論文集』香港：香港中文大学.

延安時事問題研究会編

1961『抗戦中の中国文化教育』上海：上海人民出版社. (『抗戦的中国』シリーズ第5冊)

章開沅・林蔚編

1991『中西文化と教会大学-第一回中国教会大学史シンポジウム論文集』武漢：湖北教育出版社.

章開沅総編集

2004『中国の教会大学』石家荘：河北教育出版社.

[2005年12月9日受理，12月26日審査終了]